

会長の挨拶 5 日常生活への実践

精神世界の向上と同時にその日常生活への実践を要求するという点を挙げなければならない。ロータリーにあっては、理論の正当性を検証するものは実践である。如何に多くのロータリアンが高邁な理想を説きながら、その実践において非ロータリーの活動を行い、ロータリアンとしての指導力を失って行ったことか。このように、一方においては日常生活とクラブ活動を基盤として、あくなき理想の追及と他方において、その各時点の精神状態に応じての理想の絶えざる実践が同時に各ロータリアンに要求されているのであって、このことは、仏教世界の用語で言えば、深山幽谷にこもり、世俗の塵を離れ、ひたすら仏法の奥義を窮める往相回向と他方一度び悟りに達するや、それを社会万般に対してこれを適用する還相回向とを、ロータリー思想が日常生活において同時に要求するものであることを物語るものである。この立場からのみ分析すれば、ロータリーはあたかも在家の仏教と性質を異にすることがないと言ってもあやまりではないであろう。

したがってロータリー思想の随所にみられるところの職業奉仕という言葉はしばしば二つの異なった意味内容で用いられる。一つは、ロータリアンがその職業の管理者として、その職業の遂行を通じて自らの精神世界の内省を行う心の状態の意味であり、他はその内省された心の状態をさらに日常生活に実践する行動の意味である。そして、前者の正当性は後者によって客観化乃至現実化されなければならないのである。このようにしてロータリーの最も忌み嫌う概念として二重人格がある。理論的に探求されたものは実践可能でなければならない。この点はまた、ロータリーは不可能な理念の追求と実践を各ロータリアンに義務付けるものではないということを物語るものである。ロータリーは理想を求める。しかし、それは星の世界にのみ適用されるべき理想を求めるものではないのである。

(小堀憲助著「ロータリー思想の理論構造」より引用)